

## 控え目の政治・静かな目 平和の心

幹事長時代の昭和五三年四月一〇日に行われた鼎談。控え目の政治を説く大平と静かな目・平和な心を語る井上氏（平成三年死去）が、中国での見聞、作家論、政治家論等を語り合つた。

対談者 作 家・井上 靖

一枚の絵社長・竹田 敏道

竹田 きょうは両先生、初会合ですか。

大平 ええ、こういうかたちのは初めてですね。

竹田 どなたかの激励会で、先生と幹事長がお話しになった……。

井上 あれは環境庁長官の山田久就さんでしたね。山田さんとは明治四十年生まれで同じ歳です。同じ第四高等学校ですが、調べてみたら山田久就は既に大正十五年に卒業しているんです。（笑）私の卒業は昭和五年ですが、年齢は同じなのです。私は中学、高校ともに入るとき落第して、五年の差がついてしまった。それにこっちは大学でもマゴマゴして昭和十一年に卒業、彼は昭和三年卒業。そこで九年の差がついてしまった。

大平 先生は山形高等学校を受験されたが、途中でやめられたといいますが……。

井上 はい。

大平 その当時、先生は理科だったんです。お医者さんを志しておられたのです。

井上 あの山形高等学校には稲葉修さん、彼はストライキをやって退学、卒業してないんですが、検定を受けて中央大学に入ったんです。

大平 週刊誌に、そのころのすごい写真が出てましたね、稲葉君は非常に秀才だったんですよ。

竹田 幹事長も秀才だったんですか。

大平 いや私のは臭い方じゃないですか。(笑) ほんとうに鈍才だなあ、僕は。

竹田 娘むこの森田一さん(大蔵省保険第二課長)とは、どっちが秀才ですか。

大平 森田はコツコツと勉強して点取り虫だったんですよ。私は点取りは下手で……。 (笑)

笑い顔が可愛いという

井上 幹事長、竹田敏道さんが絵画の大衆化運動をやって十年経った。それで、その間「一板の繪」という雑誌を出していて、それに毎月ずつと彼が対談をやっていました。それがこんど一冊の本になるんです。それに序文をわたしが書きました。

竹田 先生のご好意がこもった文章で感激しています。

大平 はあ、そうですね。

井上 敏道さんとはずいぶん古いんです。まだ彼が一介の新聞記者だったんです。長いつきあいだけれども、一回も裏切られたことはありません。

竹田 僕の話はいいですよ。(笑)

井上 厳道さんの話で、ついでですが、非常に感心していることは、北海道へ佐藤春夫先生が行かれたとき、私と家内がお供をしました。その時は彼はまだ社長にならない前の編集局長ぐらいでしたが、全面的に世話してくれました。その時に佐藤家と初めて知りあいになりました。それから後に佐藤先生がなくなりましたが、佐藤家というのはなかなかいるんな問題があつて、三千人といわれている門弟が、なかなか寄りつけないんです。これは見事なことです。そういうところはえらいです。まちゃんとしているのは厳道さんの力です。

竹田 きょうは幹事長、京都（京都府知事選で保守が勝つた）の祝杯でもあげたんですが、大平 そうそう、（笑）おかげさまで。

竹田 新聞によりますと、幹事長も行かれて二回も演説されたそうですね。大平さんも演説ができる、（笑）失礼な話ですが……。

大平 上手ではないが、べつに言語障害がないからね。ただ笑い顔が可愛いというわけで。（笑）

### 張家口と大連、人民大会堂

竹田 さきほど井上先生と話をしたんですが、幹事長は中国にはいらしたことがありますか。

大平 二回。戦前は昭和十四年に一年半ほどいました。

井上 どこにおられましたか。

大平 張家口、興亜院の経済課長をやっていました。

井上 その時はどこにお住まいでしたか。北京ですか。

大平 張家口です。

竹田 あれは蒙疆政府ではなかったですか。

大平 蒙疆政府がありまして、蒙古軍がありまして、われわれは興亜院の連絡をやったんです。これは内閣の役所なんです。それで、何をやるかというところ、蒙疆政府を指導するということですけど、実際の指導は軍がやっていたんです。

竹田 河本大作つてのがいなかったですか。

大平 司令官が蓮沼中将で、この方は侍従武官長をやった。参謀長が田中新一。私どもの長官が酒井中将という軍人で、行政をちよつとだけやっていました。

井上 それは昭和何年ごろですか。

大平 昭和十四年、まだ戦争が始まったばかりのころです。北京、上海、よかったですよ。大連もよかったです。あのあたりずっと、一年半ぐらいいる間に旅行しましたが、実によかったですね。戦後は田中角栄君と一緒に、日中国交正常化の共同声明を出すときと、そのあと日中航空協定調印の時、二回とも毛沢東、周恩来に会いました。紳士でしたね。

竹田 井上先生はもう五、六回行かれたんではないでしょうか、戦後というか昭和二十年以降は。

井上 八回行ってます。最初は、まだソ連大使がスピーチしましたね。

竹田 劉少奇のころですか。

井上 はい、それがソ連革命何周年かの祝賀会でした。二十三年くらい前でしようか。二回目に行った時は、いわゆる北京学派の人たち張蘇、呉ニハなどという人たちと親しくなった時には、その前に行って会った周揚とか田漢とかはいなくなっていました。こんどまた出てきましたがね。それから

現在、地下宮殿といつてますが、明の十三陵の定陵を発掘したのが北京学派の中の張蘇です。彼がや  
つたというところは一切消してありますが、またこんどの時代はそんなことは隠さないでしょう。三回目  
に行つたときは文学者と親しくなつて、それまでも会つてますけれど老舎、巴金、こんど出てきた  
茅盾ほつもん。その時は文革の第一日目に北京学派がいつせいに消えました。そして文革が始まつて老舎が自  
殺して巴金、茅盾その他みんな消えました。出てこなくなつたのです。それから中日国交正常化の時、  
むこうの大臣に招かれて参りましたが、その時に人民大会堂で引見されたのが鄧小平でした。

昭和五十年、日本作家代表団の団長として司馬遼太郎、水上勉君らと行きましたが、上海についた  
とき、指導者の一人が会いたいから北京に戻れということ、僕が団長でしたので、人民大会堂で会  
つたのが姚文元やうぶんげんでした。その時の印象は非常に秀才でした、四十一歳でした。そして国史の編纂の発  
表してくれました。それから一年おいて行つた時に会つたのは鄧穎超とうえいせう女史、周恩来夫人でした。こ  
んどは姚文元が失脚して消えています。考えてみますと、中国のある時代の側面は書けますね。です  
から僕は、いつも現時点でのつきあい。三年前に東京でお目にかかりましたという挨拶はしません  
いままで。その場所だけの挨拶ですね。いつ消えるか、いつ会えるか。会つた人がつぎのときには  
消えていた。一回のこらずそうです。いままではずっとその経験です。消えないのは政治の主流から  
はずれている人、例えば廖承志さんとか……。ああいう人たちは本流に入らないから消えませぬね、  
そして昨年行つた時には、軍人あがりの年をとられた副主席、その人に人民大会堂で初めて食事をこ  
ちそうになりました。

竹田 文学者が行つても、政治家というか現執行部の方が出てきますか。

井上 いえ、出ません。政治家でない人ですね。対外友好協会の幹部とかの人たちですね。

竹田 文学者の目で観まして、中国はこれからどうなりますか。

井上 一切それは私にはわかりませんね。あれだけ一つの国づくりに専心していただけますけれど、それが成功するかしないかは、それは歴史ですからね。

書はぜんぜんやってないが……

竹田 幹事長の書を、西田という参議院議員が中国に贈ったということですが、幹事長は書をやっておられるんですか。

大平 ぜんぜんやってないです。(笑)ただ廖承志さんに書けといわれたので書きました。

竹田 どんなことを書かれたんですか。

大平 うーん、「過去はいろいろあつたけど、これから一日一日を大事にしましょう」ということね。

井上 いい言葉ですね。

竹田 むこうで感心されたそうですね。井上先生も書をやられたんでしょ。

井上 とても書はやれませんが、「書」のことは書きますが。

竹田 「中央公論」に顔真卿がんにんけいのことを書かれましたね。

井上 顔真卿という人は、悪口が半分で、ほめられるのが半分。唐から明清時代までそうですが、その肯定的批評と否定的批評を合わせて一冊の本にしたのがあります。それをめぐって書いたんですが、その中の肯定的文章で、顔真卿は偉い、いい字を書いたと認めるほうの側の批評で、僕が一番いいと思うのは、

点は墜石ついせきの如し 劃かくは夏雲の如し  
鉤こうは屈金くつきんの如し 戈かは発露はつろの如し

この中でも一番いいのは「点は墜石の如し」です。点は天から落ちてきた石のようだと。そして夏雲のわくようにゆったりと……。

竹田 幹事長もいろいろ字を書かざるを得ないことが多いと思いますが……。

井上 多いでしょうね。

大平 書かざるを得ない、恥をかく。(笑)旅行をするたび毎に書かされてね。

竹田 井上先生、字というのは、うまい下手というよりも心ですね。

井上 それは心なんでしょうね。そこまでゆくのが大変ですね。

竹田 熊谷守一先生なんかは子どもみたいな字ですがね……。

井上 そうですね、熊谷先生は。

竹田 仏様と書いてもとてもいい仏様です。政治家の方もあんまり字がうまくなったら駄目ですね。

大平 そうですね、個性が出た字がやっぱりいいんでしょうね。

竹田 個性ですね、だから日本の書家よりも画家のほうがいい字を書きますね。

井上 そうですね。

竹田 先生、文士は筆が駄目だという説がありますね。

井上 ペンだと個性が出てますからね。筆を持たせると、あらゆる人が駄目なんです。谷口吉郎さんは文士の碑を取扱っています、筆よりもペンで書き直してくれといいます。

竹田 政治家の字では……。

大平 うーん。

井上 吉田茂さんの字なんかはいいですね。

### 作家と政治家の晩年は

竹田 幹事長はね、よく読書されるんですよ。もう本を読むのが好きという域を越えて、書に淫しているほうですね。そういう人はいまの政治家にはいませんですね。

大平 自分で読んだ本は四国の選挙区へ送って、それが大平記念文庫です。

竹田 蔵書はどのくらいありますか。

大平 五千冊くらいありますかね。

竹田 専門書が多いんですか。

大平 大体の傾向として歴史的なものが多いようですね。文学、社会学をミックスしたようなもの、宗教のものなどもある。

井上 お読みになった本について、お書きになったらおもしろいですね。それは大変な刺激になります、政治家がこれだけ読んでいると。全部の政治家の認識を改めますね。学生時代からですか。

大平 学生時代からです。乱読のほうではない、本を選ぶほうで。

竹田 旧池田派というのは前尾繁三郎、宮沢喜一さんでも大平さんでも、なかなか読書家が多いんですね。

大平 うん、前尾さんはもっと本を沢山もっていますね。私なんかは火事で焼けたりして……。



竹田 先生の書庫にはみんなでのどのくらいありますか。

井上 どのくらいですかね。

大平 整理なんか一人でやるんですか。

井上 自分でやってます。僕は人を使うことが昔からできないんで……。

竹田 井上先生がこの前、日経の『私の履歴書』に書かれたんですが、その最後のところで、「私は七十五だけど、あと十年辛抱しなくてはならない。人生の最晩年に、光り輝く仕事をしたい、その最晩年にいい仕事をする、いままでの仕事が全部光を浴びて生きかえってくる」と。

大平 なるほどね。

竹田 だから作家というのは、最後に書いたものが最高でなければいけないんです。それが人生の主役でしょう。

大平 そうじゃない人が多いです。(笑)

井上 最後が駄目ですとね、多少いい仕事をして、それが全部消えてしまう。最後に一番重要な作品を置くと、それまでの作品が生きますね。これは先輩の仕事のみで感じて感じたことです。

竹田 志賀(直哉)先生は晩年いかがですか。

井上 志賀先生は汚しませんでしたね。晩年に特別ないい仕事を持ってなくても。戦後は持っていないが、しかしこれといった仕事はしないけれども、ひとつも汚れていない。

竹田 汚す人もいるわけですね。

井上 それはいますね。晩年につまらない仕事をする人もいます。

竹田 政治家も?(笑)

井上 大平先生は立派。(笑)

政治は控え目のほうがいい

竹田 大平先生はずっと政治家の晩年を見ていて、例えば池田(勇人)さんはああいう死に方でしたが、吉田さんはいい死に方でしょうかね。

大平 まあいいじゃないですか。

竹田 佐藤(栄作)さんは……。

大平 うん、佐藤さんは……。

竹田 なかなか難しいですか。

井上 先生は三木武夫先生と非常に親しいんです。

大平 三木さんは個性が非常に強烈ですね。僕は三木内閣で、ずっと大蔵大臣でおつきあいました。た。

井上 そうでしたね。

大平 率直に言つて、僕と全然違ふところがありましたね。あの人は権力の座についてから、いわゆる自負心の強い人でした、私からみますとね。何回も彼と会つて一時間も二時間も、理解しあおうと思つて話し合つたんですが、どうもかみ合わなかつたですね。それは自分も自民党におつて、自民党が自分を総理にしてくれ、自分の政権は自民党の諸君がサポートしてくれた、だから自分は自民党に感謝しなければならぬという。それなら、進むも退くも自民党というものを起点にしておやりに

ならなければいかんのではないですかと、いつも言っていたんですが、彼はそれはその通りだと。論理ではわかるんだが、感情でわからない。この自民党は悪だというわけだ。これをなおさなければいかん、改革せねばならん、この自民党は腐つておる、だからこれを改革するのは俺しかいないんだというふうな発想なんだね。僕は自民党も、どの政党も人間が作ったもので、そんなに立派なものではない、立派なものはこの世の中にはないと思う。まあ私は改革ということに対して、その点についてはやや二ヒルでしてね。

井上 そんなことしても、よくなるものかと。

大平 そう思つてね。ただまあ、あまり政治のコストが高すぎちゃ迷惑ですから、できるだけ無難に政治をやつてゆく、できるだけ皆さんに損害を与えたり苦しみたりしないで、できるだけ政治というのは控え目のほうがいいんだという考えですがね。その点、三木さんとなかなかかみ合わないんだ、話しても。彼は非常に自負心の強い人ですからね。まだかみ合っていないね。(笑)

### 政治信条について

竹田 だいぶ政治の話になつたんですが、幹事長は田中角栄さんとはかみ合いますか。

大平 かみ合うものと、かみ合わないものとありますね。三木さんなんかとは違うな、彼は。手口が甘くて。第一、おもしろいわな。(笑) 彼は陽気ですね。僕は田中内閣の外務大臣になって彼のパートナーなんだが、彼はなんでも肝心なところを相談しないから失敗するんだよ。あれはとつくりと相談してくれたらね。

私は、こういうことを田中さんに言ったことがある。池田内閣ができたとき、その時は現役でしたがある政界の先輩が、官房長官だった私にある浪人を紹介して、昭和三十五年の総選挙の時、百万ドル、三億六千万円の現金をとってくれという。自民党は財界から金を集めてやるが、これは国際的にアメリカの金なんです。そういうことは駄目だから、貧乏は貧乏なりに自分で総選挙をやりますと言ったが、全く執拗にやってきて、どうしても取れという。それを断わり抜いたんですよ。するとその人は、大平は別なルートから金をもらっているから断わったんではないかというんですね。僕はロッキード事件など全然意識しないで、こんな話があったと話をしたんですが、彼はそれを聞いていた。どうしてあんなふうになったのか……。まだ糾明されてないが、彼はおもしろ味はあるんだけど、慎重を欠くね。

竹田 政治と商売を混同しちゃったのではないでしょうか。大平さんが断わり抜かれたこと、それがひとつの政治信条ですね、日本の政治のことなら女房を質においても……と。

大平 それほど立派じゃないけどね。(笑) 献金を受けてやっている、あまりいばれた話ではないが……。女房にはなかなか頭があらがない。